

Ⅱ. モーツァルトのオペラ



1. モーツァルトの生涯 — オペラを中心として —

- 1756 年(0 歳) ザルツブルクに生まれる
- 1768 年(12 歳) オペラ・ブッフア《ラ・フィンタ・センプリチェ》を作曲
- 1770 年(14 歳) ミラノ大公家宮廷劇場でオペラ・セリア《ポントの王ミトリダーテ》を初演、大成功をおさめる
- 1781 年(25 歳) ミュンヘン宮廷劇場でオペラ・セリア《イドメネオ》を初演
大司教と決裂。ザルツブルク宮廷楽団を解雇される
- 1782 年(26 歳) ブルク劇場でジングシュピール《後宮からの誘拐》を初演、大成功をおさめる
- 1786 年(30 歳) ブルク劇場でオペラ・ブッフア《フィガロの結婚》を初演
- 1787 年(31 歳) プラハ国立劇場でオペラ・ブッフア《ドン・ジョヴァンニ》を初演、大成功をおさめる
- 1790 年(34 歳) ブルク劇場でオペラ・ブッフア《コジ・ファン・トゥッテ》を初演、成功をおさめる
- 1791 年(35 歳) プラハ国立劇場でオペラ・セリア《皇帝ティートの慈悲》を初演するが、不評に終わる
ウィーン劇場でジングシュピール《魔笛》を初演、成功をおさめる
12 月 5 日死去

[西川尚生『モーツァルト』(人と作品)]

「オペラ・ブッフア opera buffa」とは

「ふざけたオペラ」。喜歌劇と訳されることもある。18 世紀のイタリアで喜劇的なオペラに対して与えられた呼称で、オペラ・セリア（重厚なオペラ）と対照的に用いられた。 [クラシック音楽事典]

「オペラ・セリア opera seria」とは

オペラ・ブッフアに対する語で、正歌劇などと訳される。神話や伝説的英雄物語などの抒情的悲劇を題材とし、ドラマティックなレチタティーヴォと声の魅力を発揮するアリアが特徴。18 世紀ナポリ派オペラで成立、その後オペラの主流をなした。 [クラシック音楽事典]

「ジングシュピール Singspiel」とは

歌芝居とも訳される。本来ドイツ風の歌や音楽を伴った劇全般を意味したが、18 世紀中頃からドイツ固有の民衆的な歌劇を指すようになり、喜劇的な内容で地の台詞が音楽の間にはさまれて筋が展開されるのを特徴とする。 [クラシック音楽事典]

2. 台本作家 ロレンツォ・ダ・ポンテ



Lorenzo Da Ponte

1749.3.10 - 1838.8.17

イタリアの脚本家。本名エマヌエーレ・コネリアーノ Emanuele Conegliano。ユダヤ系イタリア人でカトリックに改宗。ウィーンで宮廷詩人として多くの歌劇脚本を書くが、なかでもモーツァルトの『フィガロの結婚』Le Nozze di Figaro (1786)、『ドン・ジョヴァンニ』Don Giovanni(87)、『コシ・ファン・トゥッテ』Cosi fan tutte (90) が著名。のびやかな構成と簡潔で的確な語法に特徴がある。『回想録』Memories (1807) では自らの放浪生活を通して当時の文化状況や人物を描いている。【世界文学大事典】

ダ・ポンテ 年譜

1749 年	0 歳	ヴェネツィア近郊の村にユダヤ人の皮革商人の長男として生まれる
1763 年	14 歳	カトリックに改宗し、その際の司教の名をもらって以後ロレンツォ・ダ・ポンテと名乗る。当地の司教学校に入学。
1773 年	24 歳	ヴェネツィアから追放される。
1783 年	34 歳	サリエーリの紹介でヨーゼフ 2 世に拝謁。宮廷劇場詩人に任命される。
1785 年	36 歳	モーツァルトと『フィガロの結婚』の仕事に取り組む。
1787 年	38 歳	『ドン・ジョヴァンニ』がプラハで初演され、大成功を収める。
1790 年	39 歳	『コジ・ファン・トゥッテ』がウィーンのブルク劇場で初演される。
1791 年	40 歳	皇帝レーオポルト 2 世の庇護を失い、ウィーンから追放される。
1792 年	41 歳	ロンドンに渡る。
1805 年	56 歳	アメリカに渡る。
1826 年	77 歳	ニューヨークで『ドン・ジョヴァンニ』のアメリカ初演に関わる。
1833 年	84 歳	ニューヨークで米国最初の常設歌劇場の設立に参画。
1838 年	89 歳	老衰のため、ニューヨークで死去。

[『フィガロの結婚』 新国立劇場]

3. ダ・ポンテ三部作

<I> フィガロの結婚

Le nozze di Figaro K492

4幕のオペラ・ブッフア (イタリア語)

もともになったのはフランスの劇作家ボーマルシェの同じ題名の戯曲

1786年5月1日、ウィーンのブルク劇場で初演

[堀内修『モーツァルト オペラのすべて』]

あらすじ

『セビーリャの理髪師』の後日談で、才気煥発のフィガロとスザンナが、横恋慕するアルマヴィーヴァ伯爵を出しぬいて、幸福な結婚にいたるまでをえがく。序曲や『もう飛ぶまいぞ、この蝶々』『恋とはどんなものかしら』などのアリアは有名。 [音楽中辞典]

台本について

ウィーンで1783年に、前年ペテルブルクで初演されていたパイジェッロの『セビーリャの理髪師』が上演された。これを聴いたモーツァルトが、ボーマルシェとその芝居に関心を持った。『フィガロの結婚』のオペラ化を考え、ダ・ポンテに持ちかけたのは、モーツァルトのほうだったらしい。

翌1784年4月27日、パリのコメディ・フランセーズで、ついにボーマルシェ作の芝居の『フィガロの結婚』が初演された。・・・

パリにおける人気はウィーンにも伝わったが、上演はできない。エマヌエル・シカネーダーが上演を計画したが、皇帝により禁止されてしまった。身分制度をあざ笑う風刺劇は、帝国の首都においても、当然危険な作品だった。だがそれだけに『フィガロの結婚』はこの上ない話題作でもあった。オペラ化して、もし上演できれば、評判になるのは間違いない。モーツァルトに話を持ちかけられたダ・ポンテは、乗り気になる。なんとか上演できると読んだのだ。ちょうどこの頃、サリエリが別の台本作家と組んでいたのも、何か手を打たなければならない、という事情もあったようだ。

[堀内修『モーツァルト オペラのすべて』]



ボーマルシェ



初演でスザンナを歌った
アンナ (ナンシー)・ストーラス



初演でドン・バジリーオとドン・クルツィオ
を歌ったマイケル・ケリー

<Ⅱ> 罰せられた放蕩者、またはドン・ジョヴァンニ

Il dissotulo punito, ossia Don Giovanni K527

2 幕のドラマ・ジョコーゾ (イタリア語)

1787 年 10 月 29 日、プラハの国民劇場 (現スタヴォフスケー劇場) で初演

[『モーツァルト オペラのすべて』]

あらすじ

17 世紀スペインの騎士ドン・ジョヴァンニ (ドン・ファン) は、放蕩の限りをつくし、最後は殺した騎士長の石像によって地獄へ落とされる。序曲や『カタログの歌』などは有名。 [音楽中辞典]

台本について

《フィガロの結婚》は初演に引き続き、9 回もの上演がウィーンで行なわれたが、さらにプラハで大きな成功をおさめたことから、モーツァルトとダ・ポンテは、ボンディーニ座の上演に供するための、もうひとつのオペラ作品の制作へと取りかかる。しかしボンディーニが、ドン・ファン伝説に基づくベルターティの台本に曲を付けたらどうかとモーツァルトに提案していた頃、ちょうどダ・ポンテは、マルティン・イ・ソレルやサリエリのための台本作りに追われ、多忙な日々を送っているところであった。しかし、多忙のなかで完成されたダ・ポンテの台本は、それまでのドン・ファン伝説の系譜、すなわちティルソ・ダ・モリーナによる最初の劇作品、モリエール作の《ドン・ジュアンまたは石像の客》(1665)、ゴルドーニの韻文による劇作品《ドン・ジョヴァンニ・テノーリョまたは放蕩者》(1736)、リギーニの《石の客人または放蕩者》、そしてベルターティがガッツァニーガのために書き、大成功をおさめた 1 幕からなるオペラ台本《ドン・ジョヴァンニ・テノーリョあるいは石の客人》(1787 年 2 月)など、それぞれの要素を兼ね備えたものであった。 [モーツァルト大事典]



初演のポスター

フィナーレにおける食事の場面では居並ぶ楽隊によって三つの音楽が引用される。

それらは、マルティン・イ・ソレルの『椿事 Una cosa rara』(1786 年)およびジュゼッペ・サルティの『争う二人の間で Fra I due litiganti』(1782 年)の一節、そしてモーツァルト自身の「もう飛ぶまいぞ」である。

[磯山雅『モーツァルト 二つの顔』]

<Ⅲ> コジ・ファン・トゥッテ、または恋人たちの学校

Così fan tutte, ossia la scuola degli amanti K588

2 幕のオペラ・ブッフア (イタリア語)

1790 年 1 月 26 日、ウィーンのブルク劇場で初演

[堀内修『モーツァルト オペラのすべて』]

台本について

ダ・ポンテの三つ目の共作であり、モーツァルト最後のオペラ・ブッフアとなった作品だが、ダ・ポンテはこのオペラの台本を、もともとサリエリのために執筆したらしい。ところがサリエリが第一幕冒頭の二曲の三重唱とレチタティーヴォに手をつけただけで作曲をやめてしまったため、この台本はモーツァルトにまわされることになった。

サリエリには 1778 年にヴェネツィアで初演され、1783 年にウィーンでも上演された『やきもち焼きの学校』という台本があり、ダ・ポンテはそれを意識して、このオペラに最初は『恋人たちの学校』という題名をつけたらしい。ところがサリエリが作曲を降り、モーツァルトが新たな作曲者に決まったことから、『フィガロの結婚』第一幕のバジーリオの歌詞を借用した『コジ・ファン・トゥッテ』という新たな題名がつけられ、『コジ・ファン・トゥッテ、あるいは恋人たちの学校』というこのオペラの正式名が生れることになったのである。

[西川尚生『モーツァルト』(人と作品)]

『フィガロの結婚』第一幕

バジーリオ：

Così fan tutte le belle!

お美しい御婦人方は、皆こんなもんで！

Non c'è alcuna novità.

別に珍しい事ではございません。

[オペラ対訳双書 フィガロの結婚]

初演について



ミハエル広場に面した初演時のブルク劇場



初演のプログラム

初日に皇帝は臨席しなかった。病床にあったのだ。オペラは1月28日、30日と上演されて……。しかし上演は打ち切られる。2月20日にヨーゼフ2世が死去したからだ。……。劇場は喪に服して、上演は中止された。6～8月に再演はされるが、成功せず、上演は終る。上演されたのは計10回で、モーツァルトの生前、ウィーンで上演されることはなかった。

[堀内修『モーツァルト オペラのすべて』]



初演でグリエルモを歌った
フランチェスコ・ベヌッチ

初演の批評

《デラックス・アンド・モード誌》(ウィーン)

「わが劇場ではモーツァルトの新しいすばらしい作品をやっている。……その題名は『コシ・ファン・トゥッテ』。音楽についてはそれがモーツァルト作であることがすべてを物語っていよう。」

ニコラウス・L・ツィンツェンドルフ伯の日記

「新しいオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』を観る。モーツァルトの音楽は魅力的で、内容はとてもおもしろい。」

[チャンパイほか『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』]

その後の『コジ・ファン・トゥッテ』

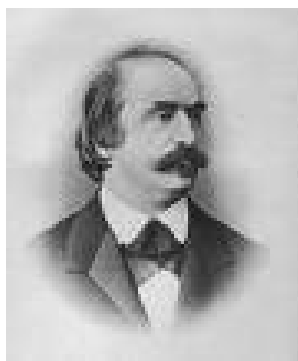
ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン から ルートヴィヒ・レルシュタープへ 1825 年 5 月

《ドン・ジョヴァンニ》や《コシ・ファン・トゥッテ》のようなオペラは私には作曲できないでしょう。こうしたものには嫌悪感を感じるのです。このような題材を私が選ぶことなどありえません。私には軽薄すぎます。

[チャンパイほか『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』]



エドゥアルト・ハンスリック 1875 年



台本の際限もない平板さこそ、モーツァルトが《コシ・ファン・トゥッテ》につけた愛すべき音楽をいたるところで抹殺しているものだ。われわれの時代の教養の力ではどう努力してもこれらを和解させることはできない。

ダ・ポンテの原作台本は知性を欠く、無作法なものだ。なぜなら、そこではふたりの男が、その恋人たちをまどわし、数時間以内に不貞をおこなわせてしまうのに成功するのだから。・・・

[チャンパイほか『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』]

リヒャルト・ワーグナー 《オペラとドラマ》 1851 年



あらゆる音楽家の中でもっとも天分に恵まれたこの人は、現代のわが音楽製造人たちの曲芸をなんとわずかしかなかったことだろう。彼らは無味乾燥で価値のない基礎の上に黄金に光り輝く音楽の塔をうち建て、詩作品のいっさいが無趣味でからっぽなものではないのに陶醉し感激したふりを演じてみせるのである。・・・おお、私は《コシ・ファン・トゥッテ》に《フィガロ》のような音楽を案出することができなかったモーツァルトをどんなに心から愛し、崇拝していることだろう。もしモーツァルトにそんなことができていたとしたら、音楽というものはどんなに破廉恥にはずかしめられていたことだろう！

[チャンパイほか『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』]

1881 年に、自筆譜にもとづいた楽譜が出版される。

1897 年、ミュンヘンでリヒャルト・シュトラウスが、ドイツ語訳だがオリジナルを尊重した台本で、すぐれた上演を行う。



リヒャルト・シュトラウス

もしわがオペラ劇場が正しい方向に進むならば、《コシ・ファン・トゥッテ》はあらゆるドイツの劇場のレパートリーの中で、せめて、いままで受けるのが当然だった貴賓席をあてがわなければならないだろう。・・・

[チャンパイほか『モーツァルト コシ・ファン・トゥッテ』]

そして 1900 年には、ウィーン宮廷歌劇場で、マーラーが、新しい演出の『コシ・ファン・トゥッテ』を指揮する。

これがきっかけで、急激な変化ではなかったが、20 世紀を通じ、『コシ・ファン・トゥッテ』は名誉を回復してゆく。



グスタフ・マーラー

第二次大戦後は、『フィガロの結婚』などと並ぶモーツァルトとダ・ポンテの傑作として、オリジナルのイタリア語による、力を入れた上演が行われるようになる。ウィーンやザルツブルク、ベルリンやロンドンで、一流の指揮者や歌手による上演が繰り返され、歌劇場のレパートリーに必要不可欠な作品となった。

[堀内修『モーツァルト オペラのすべて』]